

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月2日)

授業者：〇〇

範囲：選挙制度

主な感想・代案

- 導入のインパクトが薄い気がしました。「これが実際の選挙でも同様の問題が起こっています」と言われた時に、イマイチぴんと来なかったです。それゆえに、主発問の義務性が強調されてしまった側面もあるのかなと感じています。「選挙に行くべき」という建前的な議論は生徒も日々耳にしているという前提から入りたいと思います。
- 私であれば、導入で少し煽ってしまうかもしれません。本当に一票で何か変わるのか？と。だれもが素朴に思うことかもしれませんが、「自分以外の誰かが投票してくれさえすれば、自分くらい投票しなくても大丈夫」という意見に対して、どこまで真正面から反論できるだろうか？という点を導入で考えさせるかもしれません。
- 「現実には、選挙に行く or 行かない」の話を一旦わきに置いたとして、この授業でどうしても伝えておくべき内容とは何なのでしょう？私は、生徒が選挙に行くいかないという選択がどういう結果に影響を与える可能性があるのかであったり、世界各国の政策（罰金制度含む）がどういう想いで作られたのかという点などについて、生徒が「耳で聞く」のではなく、「実感する」ような理解をする必要がある気がします。究極的には、本人が行動を起こすか起こさないかは本人の自由だし、ある意味自己責任です。ただ、その選択の意味をあらかじめ伝えておくこと、それも伝えるというのが、「本当に理解できるように」伝えることが重要だと思います。その点において、今回の罰金制度の話は、単に賛否両論を問うものになってしまっていて、選挙制度の意義そのものを問うところまで迫っていないような気がします。
- 私であれば、罰金制度を行う際の賛否の理由をある程度あらかじめ示してしまうかもしれません。そもそもオーストリアはなぜこういった制度を設けているのか？現地で批判はないのか？などを乗り越えた上で生徒には自分の意見を書いてほしい。そういう意味では更なる教材研究が欲しかったように思います。

【コラム】理論と実践の接点

選挙に行くことをどこまで推奨してよいのか？という点は非常に挑戦的な論点で面白いと思います。押し付けにならないようにという配慮が前提としてあるのだと思いますが、こういったことを問い直す視点にも価値があると思います。（念のために言うと、教師の政治的中立性の議論は、特定の支持政党を擁護するような授業にならないようにすることを促す点をさします。なので、選挙に行くべきか否かを論じる論点とは少し異なります。）

今回の内容で言えば、投票に行く行かないの議論の前に、生徒を権利主体として育て上げるということは重要になると思いますし、自分の権利が侵害されていると思ったときに、こういった意思表示の方法を考えさせるかという点を考えさせ、その一つとして（強力な選択肢として）選挙があるということを実感させたいと思います。そういう意味では、主権者教育の問題を子どもの権利条約の観点から語っているような本は参考になると思います。

【参考文献】林大介『「18歳選挙権」で社会はどう変わるか』集英社。